

二〇一九年七月三日 開催へラグビーを知ってワールドカップを楽しもう！

南の島のラグビー強豪国——トンガとフィジーにおけるラグビーの持つ社会経済的意味

小野塚和人

■ 講演者……小野塚和人（本学英米語学科講師）

■ 司 会……高杉忠明（グローバル・コミュニケーション
研究所所長）

一．問題の所在

日本のラグビー界において、トンガやフィジー出身の選手が活躍しているのはなぜなのでしょう。トンガやフィジーと日本の間にはどのような経緯があつて選手達が来日し、ラグビー界で活躍を見せているのでしょうか。本講演会の目的は、ラグビーワールドカップの開催と併せて、オセアニア地域研究の啓発を試みることにあります。本講演会では順天堂大学より木内誠先生をお招きし、トンガとフィジーチームのパフォーマンスの特徴について、スポーツ科学研究者の視点から講演をお願いしました。本講演会の前半を成す私の話では、トンガとフィジーのラグビーをめぐる社会経済的背景

を解説します。

トンガと日本との関係については、大東文化大学の研究者（小林真生氏^ら）や、北原卓也氏らによる一定の研究成果が存在しています。また、フィジーのラグビーに関しては、Yoko Kanemasu 氏、Gyozo Molner 氏、Dominik Shieder 氏らの成果があります。今日はこうした成果を紹介し、ラグビーとオセアニアの関係について考えます。

サッカーやオリンピック各競技とは異なり、ラグビーでは国籍に関係なく各国の代表になれます¹。日本代表でも現在、五名のトンガ出身選手が活躍しており、かつてはフィジー出身選手も代表入りしていました。その他、トップリーグでも相当数のオセアニア出身選手が活躍しています。特に最初期において、彼らはどうのような経緯で日本に到来してきたのでしょうか。本講演会では、まずラグビーをめぐるトンガと日本との関係の草創期を振り返ります。次に、フィジーと日本の



講演する小野塚先生

関係を考察し、ラグビーの持つ現地での社会経済的な意味を考えます。そして、今後の研究課題を示すこととします。

二. トンガ出身選手の到来と大学ラグビーへの参加

トンガはいわゆる太平洋に浮かぶ小さな南の島国です。人口は約一〇万人で、対馬や奄美大島と同等の面積を有しています。島の経済は第一次産業（農業と漁業）と移民の送金に大きく依存しています。農業は、コブラ、やし油、バナナが主

産物であり、主にカボチャと里芋を日本に輸出してきました。トンガにとって、日本は主要な貿易相手国のひとつとなっています。国内総生産（GDP）では、農林水産業が約二割を占めます。

次に、移民の送金は島の経済運営に欠かせなくなっています。トンガでは深刻な雇用機会の不足があり、職を得ても収入が限られているためです。そのため、国内経済は、海外在住のトンガ人からの送金に大きく依存している状況にあります（ベズニエ・北原 2009: 49）。この送金はトンガのGDPの二五〜五〇%以上を占めるともいわれます。

こうした事情もあり、在外トンガ人の人数は島の人口を上回っています。トンガ人は移住先において、清掃業務、庭園管理、ケアワーカー、調理業務補助などの肉体的労働に従事することが多いです（Lee 2003, ベズニエ・北原 2009: 49）。オーストラリアでは、オセアニア島嶼部からの労働力が介護・医療分野や農村部で大きな役割を果たしている、太平洋諸島からの労働力を受け入れる移民協定（The Pacific Labour Scheme）が存在しているくらいです。このなかで、プロスポーツ選手は移民労働者の中でも最高ランクの階層に属します。

一九八〇年代、最初のトンガ人ブレイヤーの日本への到来においては、トンガの政体である王制の存在が大きな役割を

果たしました(いまは民主化の過程にあるといわれます)。当時、大東文化大学の中野敏雄(会計学が専門)が、ラグビー部顧問として、ニュージーランドへ合宿の引率に向かいました。ただ、中野はラグビーに興味がなく、近隣の島へ休暇に出かけました。その行き先がたまたまトンガで、飛行機の隣の席にトンガ政府文部次官ナ・フェフェイが偶然、同乗していました。中野が会計学を専門にしていたことを知り、ナ・フェフェイは中野を国王トゥポウ四世に紹介しました(北原 2010a: 19)。

国王トゥポウ四世は、中野にトンガ人そろばん教師の育成を要請しました。トゥポウ四世は幼少期から親日派で、第二次大戦後は何度か来日し、珠算に励む小学生を見て、「そろばんは日本の効率性と経済発展の基盤をなしている」と考えていました⁽²⁾。珠算をトンガ国民に習わせたいが、伝手がない。そのなかで中野が登場したのです(北原 2010a: 19-20, ベズニエ・北原 2009: 50-51)。トゥポウ四世は、直接、大東文化大学への派遣学生を選定しました。そこで選出された一期生が、ホポイ・タイオネ(本来は医学部に進学予定。現在はオーストラリアで実業家)とノフォムリ・タウモエフオラウ(現在は埼玉県でラグビー指導者)でした。二期生は、シナリ・ラトゥ(現在はラグビー指導者)とワテソニ・ナモアでした。彼ら四人は、日本のトンガ出身ラグビー選手のパイオニ

アとされています(ベズニエ・北原 2009: 51, 北原 2010a: 19; 2010b: 134)。

日本に関するテレビ番組の種類も限られ、インターネットもない時代、トンガ人留学生は、日常生活にも強い不安を感じていました。しかし、トンガ人学生が恵まれた体格に大きな手足を持ち、ラグビーに卓越していたことは、日本人学生からの尊敬を集めました。強かったが故に、受け入れ側の大東文化大学の選手も歓迎したのでしょう。ここから双方の側の異文化理解に向けた試みが始まりました。トンガ人学生の側は日本語を勉強するために日本人学生と寮で同室とするなど、懸命に現地社会に溶け込もうとしました。日本人学生も英会話教材を購入したり、トンガ人留学生からトンガ料理を学んだりしました(小林 2010: 120, ベズニエ・北原 2009: 51, 北原 2010a: 19)。留学生の側も、国王の選抜というだけあって、責任感が強かったのです。

大東文化大学はトンガ人選手の活躍もあり、全国優勝を果たすことになりました。当時の鏡保幸監督がトンガ出身学生の持ち込んだ文化をつぶさずに尊重し、実践させたことはチームを大きく前進させました。トンガでは上級生だからこそ後輩を大事にするといえます。例えば、入浴の順番は下級生が最初であり、上級生が自ら進んで雑用をするというのが先輩のあり方とされます。監督の後押しもあり、部内の旧態依然

とした上下関係は解消されていきました。大東文化大学ラグビー部は「明るく・楽しいラグビー」「奔放ラグビー」とされ、各大学も追随して、海外出身選手の登用を始めました（小林 2010: 120-121）。現在の大学ラグビーでは、国外出身選手の活躍がめざましいですが、もともとはこの大東文化大学が先駆けなのです。

この草創期から現在に至るまで、トンガ出身選手の来日理由には経済的な事情が深く関わっています（Esau 2004; 北原 2010b: 140）。先に紹介したラトウも経済的に切り詰めた生活をしながら、家族に送金し、本国の家族の住宅も建設したといえます。日本は出稼ぎ先であり、社会人ラグビーの企業が提供する福利厚生は大変な魅力となっています（北原 2010b: 141）。木内先生によると、現在のトンガ出身の高校留学生も奨学金の半額を送金するようです。これも現地では相当な金額になります。

三. フィジー出身選手の到来とラグビーの持つ意味

次に、フィジー出身選手はどのような背景で来日したのでしょうか。フィジーの人口は約九〇万人で、地域経済を第一次産業（主に砂糖の生産）と観光業に依存し、トンガと同様に送金がGDPの多くを占めます。住民はフィジー系（五七％）とインド系（二八％）が中心ですが、両者の関係は必ずしも良

好ではありません。フィジーは政治的に不安定で、一九八七年からクーデターを四回も経験してきました。これにはフィジー系とインド系住民の対立関係が関与しています。確かに、フィジーの人々は「お金がなくても幸せ」という形でテレビや文献で紹介されることもあります。しかし、西欧の経済指標で見るとフィジーは、地理的にも世界の周縁であり、経済活動においても従属的な位置にあると言って良いでしょう（Kanemasu and Mohr 2014: 1391; 2012: 721, 723-724）。

フィジー出身選手はトンガ出身選手の活躍の後に到来したのは日野自動車であり、フィジーにバスを販売していたところから関係が始まりました。一九九一年に来日したパウロ・ナワルとシリロ・ロボクル、そして、ブライス・ファアゴンらは日野レッドドルフィンズの躍進に大きく貢献しました（Schieder 2014: 252-253）。特に、ナワルは七人制ラグビーで日本代表チームの監督にもなり、そして、日本のラグビー界にフィジー出身選手を採用・招へいする道筋を作った人物です（Schieder 2014: 253; Schieder and Prestenstuen 2014: 1364-1365）。フィジー社会では一九六〇年代からイギリスなど各国にラグビー選手を送出していて、日本は比較的新しい行き先となっています。

トンガ出身選手と同じく、来日後、フィジー出身選手が祖

国の家族に送金をする点も共通しています。日本を拠点にする選手からの送金は、祖国の親族全体を世話できるほどの影響力を有しています。日本のメディアでも、助け合いながら生きるフィジーの人々が特集されているのを見たことがある人もいるでしょう。イギリスなど海外でもフィジー出身の労働者たちは相互扶助によって生活していくといえます。しかし、日本のフィジー人コミュニティを調査した研究成果によると、来日後、フィジー出身選手は同郷の人とほとんど交流しなくなるしています(Schieder and Prestenudstuen 2014: 1360, 1367)。高い収入によって社会階層が上昇する日本在住のラグビー選手は異なった生活様式を採用するようです。

フィジーに関してはラグビーの持つ社会的意味について、詳細な調査成果が存在しているので、ご紹介します。フィジー系住民にとって、ラグビーの試合は自分たちの土地や伝統を守ることに同義であるといえます。フィジー系住民のラグビーの試合にかける意味合いは大きく、日本人が日本発祥の柔道や空手を観戦して抱く感情よりも強いといつて良いでしょう。フィジー系住民のラグビーとは、自らの文化の体現であり、部族闘争の現代版でもあり、アイデンティティそのものとなります(Prestenudstuen and Schieder 2016; Schieder and Prestenudstuen 2014: 1363; Kanemasu and Molner 2012)。

フィジーにはラグビードリームという表現があります。ラグビードリームが実現すれば世界の檜舞台で活躍でき、社会的にも経済的にも成功できます。その成功確率は二二・一%と、アメリカのバスケットボールプレーヤーがNBA選手になれる確率が〇・〇三%であることと比較すれば高い数値です。保護者も教員も、勉強が得意でない子どもにはラグビーで卓越することを勧めるといいます。フィジー系住民にとって、ラグビーは世界に進出するための数少ない手段のひとつとなります(Kanemasu and Molner 2014: 1392-1393; 2013: 867)。

ただし、このラグビードリームの追求には社会的支援が存在しません。選手自身は経済的な困難から、医療保険に加入できません。医療的措置が不十分なまま怪我を放置する場合もあります。さらに、こうした選手たちの多くは失業していて正式に雇用されていません。選手の家族・親族が、全面的に選手を支えます。アスリート契約や雇用のない選手たちにはラグビーをすることが日々の活動の中心になり、プロになることが人生のただひとつの目標になります。仮に成功したとしても、引退後は日本のように解説者やコーチのようなポジションが存在するわけではなく、警備員や農業に従事するなどして生計を立てます(Kanemasu and Molner 2014: 1394)。

四、MIRAB経済論とアスリート貿易

このようなトンガやフィジーと日本のつながりは、双方に利益があり、win-winの関係と言えるのかもしれない。しかし、トンガやフィジー社会の持続的な発展を考えたときに、出移民と送金に依存することにはいくつもの問題が生じます。その問題系はMIRAB経済論や従属論として主題化されてきました(Hayes 1992)。つまり、送金によって社会が下支えされるため、政府機能の改善、社会制度の効率化、経済活動の環境整備などが看過される傾向にあります。送金に依存する結果として、自発的に島の生活を改善させようとする意欲が減退してしまいます。

フィジーのラグビーを研究するKanemasuらは、オセアニア島嶼部からのスポーツ選手の出稼ぎを「アスリート貿易(muscle trade)」としています(Kanemasu and Molner 2013: 868)。世界システム論的な図式に依拠して、こうしたラグビー選手の海外での登用を強制徴用(backbiting)の現代版とする解釈も可能です。しかし、Kanemasuらは、フィジー出身選手がフィジー人らしさ、いわば国威発揚をラグビーを通じて実現しているとして、植民地主義的な図式よりも選手達の主体性に注目すべきとしています(Kanemasu and Molner 2013, 2012)。

次の研究課題として、トンガやフィジーに対して、各国か

らどのような開発援助がなされているのか、そうした支援がどのような効果をあげているのか、世界各地で振興されている観光業がどのように島の経済を浮揚させることが出来るのか、といった問題に取り組むことにしたいと考えています。

最後に、異国の日本で一生懸命に言葉を学び、現地社会に溶け込もうとした選手達、彼らを迎え入れ、有形無形に支えてこられた関係の方々々に敬意を表したいと思います。そして、丹念な調査によってオセアニアの島嶼国とラグビーの関係を



講師としてお招きした木内誠先生



小野塚先生、木内先生を紹介する高杉所長

研究されてきた方々によって本日の講演は可能になりました。併せて、御礼を申し上げたいと思います。

(1) 注

ラグビーでは国籍よりも、チームへの帰属意識の方が重視されます。ラグビーにおいて各国の代表選手になるための条件は、他のスポーツ競技と比較して独特な

体系を有しています。下記をひとつクリアすれば代表になる資格を得られます

- 一、当該国で出生した。
- 二、両親あるいは祖父母のいずれかが当該国で出生した。
- 三、三年(三六カ月)間継続して当該国に居住した(二〇二〇年からは五年になる)。

また、他国の代表経験があっても、次の三つの条件をすべてクリアすれば可能になります

- 一、国籍を取得した。
 - 二、自身の前代表国の最終戦から一八カ月以上経過した。
 - 三、七人制のワールドシリーズで四大会以上、または五輪予選で半分以上の試合でプレーしてきた。
- トゥボウ四世は戦前から伴野商会と関係を持っていた。詳細は葉室・青柳・北原(2016)を参照してください。

参考文献

- ベズニエ・ニコ、北原卓也・2009.「在日トンガ人とラグビー選手—グローバルな移動とスポーツ—」『季刊民俗学』33(4) pp.48-54.
- Esau, R. 2004. "International Migration from Tonga,

- South Pacific: A Behavioral Approach” *Geographical Review of Japan* 77 (5) pp. 352-67.
- 葉登和親‘青柳まきこ’ 北原卓也. 2016. 「第二次世界大戦前のトンガにおける日本人の足跡」『太平洋諸島研究：太平洋諸島学会誌』(4) pp. 63-95.
- Hayes, G. 1992. “The Use of Scientific Models in the Study of Polynesian Migration” *Asian and Pacific Migration Journal* 1 (2) pp. 278-312.
- Kanemasu, Y. and Molnar, G. 2014. “Life after Rugby: Issues of Being an ‘Ex’ in Fiji Rugby” *The International Journal of the History of Sport* 31 (11) pp. 1389-1405.
- . 2013. “Collective Identity and Contested Allegiance: A Case of Migrant Professional Rugby Players” *Sports in Society* 16 (7) pp. 863-882.
- . 2012. “Pride of the People: Fijian Rugby Labour Migration and Collective Identity” *International Review for the Sociology of Sport* 48 (6) pp. 720-735.
- 北原卓也. 2010a. 「このころの時間 トンガと日本の交流(上): 『えぞびん』から『ラグビー』へ」『国際人流』2010年11月号 pp. 18-21.
- . 2010b. 「在日トンガ人ラグビー選手の日本社会で
の“エンモン”」『環境創造』(13) pp. 131-146.
- 小林真生. 2010. 「多文化共生に向けた環境整備の重要性」『環境創造』(13) pp. 115-130.
- Lee, H. 2003. *Tongans in Overseas*. Honolulu: University of Hawaii Press.
- Prestenudstuen, G. and Schieder, D. 2016. “Bati as Bodily Labour: Rethinking Masculinity and Violence in Fiji” *The Asia Pacific Journal of Anthropology* 17 (3-4) pp. 213-230.
- Schieder, D. 2014. “Fiji Islander Rugby Union Players in Japan: Corporate Particularities and Migration Routes” *Asia Pacific Journal of Sport and Social Science* 3 (3) pp. 250-67.
- Schieder, D. and Prestenudstuen, G. 2014. “Sport Migration and Sociocultural Transformation: The Case of Fijian Rugby Union Players in Japan” *The International Journal of the History of Sport* 31 (11) pp. 1359-1373.